

ラテンアメリカ文学におけるエッセイ

—『アリエル』をめぐって—

井 尻 香 代 子

要 旨

はじめに

ホセ・エンリケ・ロドーの主著『アリエル』は、1900年の出版以来、植民地後のラテンアメリカ諸国の文化的アイデンティティを巡る議論の場に、常に大きな影響を及ぼしてきた。本稿では、この作品のジャンルとされてきた「エッセイ」の持つ特徴と、エッセイがラテンアメリカ文学において担ってきた機能に着目することにより、『アリエル』の思想とその形式の密接な関係のなかに、この作品が維持してきた文化的影響力の原因を探った。

1. 「エッセイ」というジャンル
2. 『アリエル』の言語と構造
3. 『アリエル』の思想

おわりに

『アリエル』は、幾重にも張り巡らされた「文学化」の手法と、統一性や連続性を拒み結論を引き出さない思想の織り成すタペストリーの組み合わせによって、エッセイというジャンルにきわめてふさわしい文学的＝思想的な作品となっている。ラテンアメリカ文学におけるエッセイは、ロドーの時代からホルヘ・ヘスにいたるまで、主観と客観をあわせもつ思想の文学として、自己と場所との有効な同一化の関係を模索し、発展させてきたのである。

キーワード：ホセ・エンリケ・ロドー、『アリエル』、エッセイ、ラテンアメリカ、ポストコロニアル文学

はじめに

ホセ・エンリケ・ロドー（1871～1917）の主著『アリエル』は1900年の出版以来、植民地を脱して独立したラテンアメリカ諸国の文化的アイデンティティをめぐる議論の場に、常に大きな影響を及ぼしてきた。したがってこの作品を対象とした多くの研究論文が存在し、そのテーマも、文体、構成、作品中に引用されている作家や作品、思想、他作品との影響関係等多岐にわたっている¹⁾。また、20世紀中に起こったメキシコ革命やキューバ革命など、ラテンアメリカの大きな社会文化的変動にともなって、礼賛、批判、再評価と、その受容に大きい振幅を経てきた作品でもある²⁾。本稿は、この作品のジャンルとされてきた「エッセイ」の持つ特徴と、エッセイがラテンアメリカ文学において担ってきた機能に着目することにより、『アリエル』の思想とその形式の密接な関係の中に、この作品が維持してきた文化的影響力の原因を探ることを目的とする。

1. 「エッセイ」というジャンル

ジャン・スタロバンスキーは“¿Es posible definir el ensayo?”（「エッセイの定義は可能か」）と題した論文において、「エッセイがいかなる規範にも従わないという原則を認めるなら、果たしてエッセイを定義することは可能だろうか」という問いを立てることから始めている³⁾。そこでまず、“essai”というフランス語の語源を遡り、後期ラテン語の「秤」を意味する“exagium”，「秤の針」の意から「量る」「コントロールする」を意味するようになる一方で「蜂や鳥の群れ」という語義も持っていた“examen”，「外に押す」「押し出す」から転じて「要求する」の意となった動詞“exigo”等を挙げ、「エッセイを書く」とは、「注意深く量ること」であると同時に「衝動を解き放つ言葉の群れ」であるとまとめている⁴⁾。そしてこの語義にもとづいてエッセイというジャンルの創始者であるMichel de Montaigne（1533-1592）の*Essais*を検証し、次のように述べている。

Constatemos ante todo que lo propio del ensayo es lo plural, lo múltiple, lo que legitima el plural del título *Essais*. No se trata sólo de tentativas reiteradas, de pesadas repetidas, de golpes de prueba a la vez parciales e infatigables. Esta pretensión de comienzo, este aspecto incoativo del ensayo, son seguramente capitales, porque implican la abundancia de una energía jubilosa que no se agota nunca en su propio juego⁵⁾.

[まず確認しておきたいのだが、エッセイの本質は複数性、多重性にあり、これが*Essais*というタイトルの複数形の根拠となっている。それは単に、繰り返される試みや計測、部分的で根気のよい証明のことではない。エッセイの持つ、この開始の欲求、この起動相こそは間違いなく主要なものである。なぜなら、その本来の実践において決して尽きることのない歓喜に満ちたエネルギーの豊かさを内包しているからである⁶⁾。]

Montaigneのエッセイの持つこうした複数性、多重性、それに伴う開始・起動のエネルギーを、スタロバンスキーはエッセイ特有の次のような二つの側面と結び付ける。

A primera vista digamos que se pueden distinguir dos vertientes del ensayo: una objetiva y otra subjetiva. Y añadamos en seguida que el trabajo del ensayo trata de establecer entre ambas vertientes una relación indisoluble⁷⁾.

[一見してエッセイにおいては二つの側面が際立っている：客観的側面と主観的側面である。またエッセイの仕事とは、この二つの側面の間に分かちがたい関係を確立することであることも、付け加えておきたい。]

この「客観的側面」においてエッセイの作者は、自分自身を含めたあらゆる人間科学の複数の題材を対象とし、それら相互の関係と構造を明らかにするべく綿密な考察を行うが、その知識は書く喜び、生き生きとした好奇心、つまり「主観的側面」によって支えられなければならない。この結合はエッセイ、すなわち文学において最も自由なジャンルにおいてのみ達成できるのである。スタロバンスキーはここから、文学におけるエッセイというジャンルの持つ特性を次のように結論付ける。

A partir de una libertad que escoge sus objetos, que inventa su lenguaje y sus métodos, el ensayo, en el límite ideal donde sólo *ensayo* concebirlo, debería saber aliar ciencia y poesía⁸⁾.

[エッセイはその対象を選択し、言語や方法を作り出す自由にに基づき、エッセイだけが感受する思想の境界において、科学と詩とを結びつける方法を知っているはずである。]

つまり、Montaigneのようなエッセイ作家は人間科学の多方面の分野における知の対象への科学的な分析と、詩的言語をもって、どんな規範にもしばられない自由な形式を作り出すことができるのである。

次に、エッセイが雑種の所産であり納得させる形式の伝統を欠くとして評価されてこなかったドイツにおける、このジャンルをめぐる状況をとりあげたテオドル・W・アドルノのエッセイ論を検討してみたい。アドルノは1958年に「形式としてのエッセイ」を収めた『文学ノートI』を発表している⁹⁾。このドイツの思想家は、非神話化が進み、世界が対象化されるにつれて、学問と芸術が互いに袂を分った19世紀末以来、エッセイはその境界線上に位置し媒体として機能するものであると述べる。そしてその特徴として第一に、「自身の用いる概念を定義したりしない」¹⁰⁾ことを挙げる。なぜなら、概念を定義するやり口に対する哲学の側からの批判が既になされ、「カントに始まる運動が、近代思想に残るスコラ的残滓にたいする反対を含みつつ、字句を定義するかわりに、もろもろの概念をそれらの発ち現れる過程から把握する方向を押し出してきているのに個別科学はあくまで批判以前の定義の約束に固執している」¹¹⁾のに対して、

反対の方向を目指すエッセイは反体系的な衝動を自己の方法に取り入れつつ、受け取った諸概念を、委細かまわず、「そのまま」導入する。そして概念の精密化は、概念同士の関係にまつのである。・・・実際には全ての概念が、置かれている文脈によって暗にすでに具体化されている。エッセイはこの具体化された意味から出発し、——エッセイはそれ自体が本質的には言語から成っている——それらの意味を推し進めていく¹²⁾。

という方法をとる。アドルノによればエッセイの第二の特徴は、総体性や連続性を求めないことである。なぜなら、

形式としてのエッセイのうちに、理論的に時代遅れになった十全性や連続性の要求を精神の具体的なやり方においても破棄しようとする欲求が、無意識のうちに、理論化されぬかたちで表明されている。全てを網羅することにあくせくしているみみっちい方法に対して、美の観点から逆らうとき、エッセイは認識批判的な動機に導かれているのだ¹³⁾。

したがってエッセイは自らを相対化し、破片において考える。それは現実そのものが破れているからであり、破れ目を取り繕うかわりに、それを突き抜けることによって自らの統一を見出す。第三に、アドルノはエッセイが歴史的に修辞法と同類であることを指摘し、伝達語に適応した思想である修辞法が聞き手に与える快感は、エッセイにおいて醇化され、対象に対する自由から生まれる幸福の理念となっていると述べている¹⁴⁾。こうしてアドルノはエッセイの意図が、

どんなにそのことを問題にしていなくても実際にはすべてのテキストが問題にしている真理と、テキストそのものを突き合わせることによって、文化の要求をぐらつかせ、自身の虚偽を悟らせること、言い換えるなら、自然の手に帰したのものとしての文化の実態があらわに示されている、イデオロギーがかった仮象を思い起こさせることにある¹⁵⁾。

と結論付ける。つまりエッセイとは、自身さえも相対化することのできるきわめて批評的な形式であり、それゆえに文化と自然との間にある直接性の幻想を打ち破ることができるのである。

以上、ヨーロッパにおいてエッセイは、科学と詩、哲学と芸術、主観と客観といった2項対立の境界にあり、それゆえに学問的価値も文学的な深みも欠く危険性のあるジャンルとしてみなされる一方で、自身が基盤とする文化への批判を可能にし、新しい思想を提示しうることを確認してきた。次にこのジャンルがラテンアメリカ文学において、どのように評価され、どのような機能を担ってきたかを見ていきたい。ハイメ・レストは、ドミンゴ・ファウステイノ・サルミアントの『ファクンド・キローガ』を取り上げた論文において、西欧ではエッセイが詩や演劇、小説よりも芸術的に重要性の低い器としてみなされてきたことを確認した後で、スペイン語圏のアメリカでは想像の文学 (la literatura de imaginación) よりも思想の文学 (la literatura de ideas) のほうが優勢であったと述べ、次のように主張している。

Por lo tanto, conviene repetir enfáticamente que, por modesta que sea su ubicación en otras literaturas—cosa que no está resuelta definitivamente, ni siquiera que se ha comenzado a debatir—, no puede existir la menor vacilación con respecto a la prominencia que el ensayo posee en Hispanoamérica, por su ejercicio continuado y por su influjo en la realidad cultural, social o política¹⁶⁾.

[したがって強調しておかなければならないが、他所の文学においてどんなに低い地位にあったとしても——最終的に決定してもいないし、議論され始めてもいないことであるが——エッセイがイスマノアメリカにおいて、その絶え間ない実践と、文化、社会、政治的現実における影響力の維持において傑出しているという点についてはどんな疑いもありえないのである。]

すなわちエッセイとは、とりわけ19世紀から20世紀のイスマノアメリカにおいて文化的、社会的、政治的影響力を持った文学ジャンルであり、現実を理解し、思想を発信する手段だった。だからこそサルミエントは『ファクンド』において、ファクンド・キローガを物語るフィクションを前面に、19世紀アルゼンチンの社会・歴史をめぐる思想を背景にこの作品を構成し、ラテンアメリカの《野蛮》と《文明》をめぐる議論と反響を引き起こしたのである¹⁷⁾。キューバ革命を準備した思想家としてもよく知られる詩人ホセ・マルティは、1891年にエッセイ『われらのアメリカ』を出版し、反アメリカ帝国主義、ラテンアメリカ主義を広く呼びかけ、ラテンアメリカ全域の知識人たちに大きな影響を与えた。一方、コスモポリタン主義をつらぬいたメキシコのアルフォンソ・レイエスもその散文作品はすべてエッセイというジャンルで発表している。19世紀前半に多くの国々が独立を達成し、植民地後の文学を模索していたラテンアメリカにおいて、科学と詩、思想と芸術をひとつの器に合わせて表現することのできたエッセイは、その自由で不定形な形式ゆえに作家の、そして当時の社会・文化的要請に応えることができたのではないだろうか。ここまで、エッセイというジャンルがヨーロッパで付与されてきた特性と植民地後のラテンアメリカ文学におけるこのジャンルをめぐる状況を概観してきたが、これを視野に入れつつ『アリエル』の形式面の分析にとりかかりたい。

2. 『アリエル』の言語と構造

『アリエル』はその構造上八つの部分からなり、プロローグとエピローグに当たる章が全体の枠組みを決定している。まずプロローグでは、シェイクスピアの『嵐』の登場人物であるアリエル像が掲げられた教室で、プロスペロと呼ばれる“un viejo y venerado maestro”が卒業を前にした弟子たちに最後の講義をするという設定がなされる。この枠組みは、“Así habló Próspero”から始まるエピローグにおいて、学生たちが先生に別れを告げ夕暮れのラテンアメ

リカの大都会の中へ歩き出すという記述で閉じられる。『アリエル』のこの枠組みについてはすでに多くの研究において取り上げられてきたが、たとえばオットマル・エッテは、超テキスト性の概念を用いて作品全体を「複雑なアルシテクスト的構造」¹⁸⁾とみなし、プロスペロの演説を音響性のフィクションと捉えている¹⁹⁾。またD. W. フォスターは、モデルニスモの代表的なエッセイであるこの作品を「文学化」している第一の前提条件こそこのメタテキスト性であるとしている²⁰⁾。すなわちこの枠組みによって、『アリエル』は二重の語り手のレベルを持つことになる。一つは内側の語り手であるプロスペロのレベルであり、もう一つは師と弟子たちが集っている教室を覗き、洩れてくる講義を読者に伝える無名の語り手である。読者は尊敬を集める先生の様子や確固たる声、軽やかな羽で今まさに飛び立とうとしているようなブロンズのアリエル像、生徒たちの親しげながら深い敬意をもって耳を傾ける様子などをのせた舞台の傍らに、いつか誘い込まれることになる。この枠組みこそがまず、『アリエル』を中立的なエッセイから遠ざけるものであると同時に、本稿第1章で述べたように、エッセイの持つ詩的性質あるいは主観的側面を実現するものとも言えるだろう。この構成はさらに、アリエルとプロスペロを効果的に登場させることによりシェイクスピア劇を喚起し、この二つの表象（および、プロスペロの演説中に言及されるキャリバンを含む）がこのテキストにおいて担う意味を常に読者に問いかけるのだが、この機能については次章であらためてとりあげたい。

では次に、IからVIの部分を含めるプロスペロの演説に注目したい。エッテによれば、この部分だけでも多様なジャンルの要素が織り込まれている。

一: además de distintos tipos de ensayo (filosófico, literario, sociológico, etc.), el discurso de Próspero, calcado a su vez de ciertos modelos del discurso académico rioplatense de la época, maneja —para dar tan sólo algunos ejemplos— el diálogo filosófico, el cuento (con un fuerte sabor orientalista, más o menos convencional por aquel entonces), la parábola, el himno, el discurso político e incluso ciertos elementos dramáticos, que nos remiten a la primera obra mencionada en el texto rodoniano, es decir, *The Tempest*, de William Shakespeare²¹⁾.

[多様な（哲学的、文学的、社会的）エッセイに加えて、プロスペロの講義は、同時代のラ・プラタ地域における学問的スピーチのいくつかのモデルを模倣しつつ、——ほんのわずかの例を挙げるだけでも——哲学的対話、（当時の紋切り型だった東洋風な）物語、寓話、頌詩、政治演説、そしてさらに、このロドーのテキスト中で言及される最初の作品、つまりウィリアム・シェイクスピアの『嵐』を想起させる戯曲的要素までも含んでいる。]

しかしながら、この多様性は不均質性ではなくプロスペロの演説の内的な機能性に従ってお

り、厳密に階層化された相互テクスト的およびアルシテクスト的構造に組み込まれているのである。その1例を挙げよう。よく知られている“el rey hospitalario”の物語はⅡ部の中核をなしている²²⁾。ロドーはこの章で人間の精神の多様な面を発達させることの必要性を説き(ensayo filosófico)、その均衡が実現されていた古代ギリシャの美をモデルニスモ特有の表現を駆使して讃えた(himno)後、このシンボリックな物語(cuento)を語る。その中心は、この慈愛にあふれ区別なく生き物を歓待した王の心には、現実を離れ理想にささげる時間と場所が常にとっておかれたという点であり、そこから人は精神の理想を育むための暇(ocio)を必要とするという結論へと向かう。そしてこの精神性と美とをテーマとする複数のジャンルの組み合わせから浮かび上がる理想的人間性のモデルは、続けて第Ⅲ部で道徳や教育と関連して論じられたのち、第Ⅳ部のテーマである民主主義、第Ⅴ部で取り上げられる南北アメリカの状況をめぐる議論の文脈の中で、読者によって見直されることとなる。そのとき旧世界の精神をめぐる古典的理想は、おのずからその可能性と限界とを明らかにしていくだろう。

プロスペロの演説にはまた、読者を引き込み説得する文学的手段が多く用いられている。最初に目につくのは、ロドーのエッセイの読者であるわれわれが、あたかもプロスペロの語りかけを耳にしているような仮構を作り出すvosotrosへの以下のような呼びかけである。

—Aspirad, pues, a desarrollar en lo posible no un solo aspecto, sino la plenitud de vuestro ser. No os encojáis de hombros delante de ninguna noble y fecunda manifestación de la naturaleza humana, a pretexto de que vuestra organización individual os liga con preferencia a manifestaciones diferentes²³⁾.

[だから願いなさい、君たちができる限り、君たちの一面だけではなく全存在を発展させられるようにと。人間の本性の高貴で豊かな表現の前では、それがいかなるものであっても、君たちの個人的な資質が異なった表現のほうを好むからといって肩をすくめてはいけない。]

—No la veréis vosotros, la América que nosotros soñamos; hospitalaria para las cosas del espíritu, y no tan sólo para las muchedumbres que se amparen a ella; pensadora, sin menoscabo de su aptitud para la acción; —²⁴⁾

[君たちには見えないだろうか、我々の夢見るアメリカが。精神に関わることについては、身を寄せている大衆に限らず庇護し、行動する能力を損なうことなく思慮深いアメリカが。]

プロスペロの語り全体にちりばめられたこの呼びかけによって、われわれは読者の位置から授業を聞く生徒の位置へと、現実からフィクションの中へと移動するのである。では、このテクストに文学的要素を加えている他の手段を見てみよう。フォスターは『アリエル』を「文学

化」(literaraturización) している要素として、これまで指摘されてきたモデルニスモの文体や修辭以外にいくつかの記号学的方法を挙げ、それらが《A, más bien B》[Aというよりは、むしろB]あるいは《No A, sino B》[AではなくB]という構文によって巧妙に説得する効果を挙げていると述べている²⁵⁾。また、詩人、作家、文学作品を思想的展開の例証や傍証として引用していることも「文学化」の要因であると指摘し、第6章のゲーテの詩や全編に現れるシェイクスピアの『嵐』への言及等多数の例を挙げている²⁶⁾。

この章では、『アリエル』の二重の枠組みを持つ構造、これを強化する vosotrosの用法、記号学的ないくつかの方法、そして文学的引用や言及など、この作品に詩的・主観的側面を付与している言語的、構造的特徴を確認してきた。しかしその一方で(エッテのジャンルに関する指摘にもあったように)、このロドー作品は、ギリシャ時代から19世紀までのヨーロッパ文明の社会文化思想と、当時覇権を握りつつあった北アメリカ文化を対象にした文化批評文や、19世紀後半から中南米知識人の間に形成されてきたラテンアメリカ主義を若い世代に向けて発信した思想的文書をその中軸とするものとして受容されてきた。この批評的、思想的文書としての側面が、どのように上述の「文学化」を実現する言語、構造的枠組みと関わり、どのような効果を生み出しているのかを、以下に明らかにしていきたい。

3. 『アリエル』の思想

周知のように、ロドーは19世紀フランスの人文主義思想家を中心に、ギリシャ、フランス、ドイツ、イギリス、そしてアメリカ合衆国の詩人、作家、政治家、哲学者についての言及、あるいはその作品の引用を行っている。また著者や作品名は直接示されていないが、明らかにそのテキストとの関わりが感じられるルベン・ダリオやホセ・マルティのような場合もある²⁷⁾。こうした幅広いロドーの思想についても多くの研究がなされてきたが、ここではテーマをめぐって複数の題材を吟味、考察し、自己批判をも含む批評を展開している三つの場合についてとりあげたい。

まず、民主主義をテーマにした議論から検討しよう。ロドーは第IV部でエルネスト・ルナンを引用しながら激しい民主主義批判を展開する。

Piensa, pues, el maestro, que una alta preocupación por los *intereses ideales* de la especie es opuesta del todo al espíritu de la democracia. Piensa que la concepción de la vida, en una sociedad donde ese espíritu domine, se ajustará progresivamente a la exclusiva persecución del bienestar material como beneficio propagable al mayor número de personas. Según él, siendo la democracia la entronización de Calibán, Ariel no puede menos que ser el vencido de ese triunfo²⁸⁾.

[したがって師は（ここではRenanを指す）人類の思想的財産に対する高い関心は民主主義の精神と正反対のものであると考えている。民主主義社会においては、人生の意義は大多数の人々に及ぼすことのできる恩恵である物質的豊かさの追求だけに次第に絞られていくのである。師によれば民主主義はキャリバンが王位につくことであるから、アリエルはその勝利に打ち負かされるほかはない。]

この文脈においてロドーはむしろニーチェの思想に近いが、“《la sociedad no existe para sí sino para sus elegidos》²⁹⁾” [社会はそれ自体のために存在するのではなく、そのエリートのために存在するのだ] という結論に至るような「超人」思想に与するには至らない。なぜなら、このウルグアイ人作家はカーライルの「英雄主義」やエマーソンの「超絶主義」を吟味し、偽の平等主義においては大衆の凡庸さ、卑俗さが少数の人々だけに与えられた精神的理想の自由な発展を妨げるとする理論に共感しながらも、ヨーロッパ由来の不正に基づいた貴族的エリート主義を批判し、フーリエの引用を通してキリスト教的な自由に基づいた平等主義を提示する。この他にも、ルソー、コント、トクヴィルの思想、シェイクスピア、プーリジェ、ボードレール、アナトール・フランス、フローベールの作品への言及と引用を織り交ぜ、vosotrosへの呼びかけ（“Embriagad al repetidor de las irreverencias de la medianía que veis pasar por vuestro lado³⁰⁾.” [君たちの傍を通り過ぎる凡庸という冒瀆を繰り返す者を得意にさせるが良い。]) をはさみながら議論は展開する。そして、世界中から流入する移民大衆によって国が作られつつあるアメリカ大陸の状況に立脚した新しい民主主義の勝利は、次のような二つの潮流の和解から生まれるとこのテーマを締めくくる。

Del espíritu del cristianismo nace, efectivamente, el sentimiento de igualdad, viciado por cierto ascético menosprecio de la selección espiritual y la cultura. De la herencia de las civilizaciones clásicas nacen el sentido del orden, de la jerarquía, y el respeto religioso del genio, viciados por cierto aristocrático desdén de los humildes y los débiles³¹⁾.

[実際にキリスト教精神からは、精神的選択や文化に対するどこか禁欲的な軽蔑に歪められてはいるが、平等の感覚が生まれる。古代ギリシャ、ローマ文明の遺産からは、卑しい者や弱い者に対するどこか貴族的な軽蔑に歪められてはいるが、秩序、位階、そして精神への宗教的敬意の感覚が生まれる。]

しかし、これは結論だろうか。いや、結論にはなっていない。前章で述べたように、ロドーは《A, más bien B》あるいは《No A, sino B》という論理を用いつつ、民主主義に流れ込む思想や概念を調べ、突合せ、その欠点と美点を取り出して、問題点のありかを示したに過ぎない。そして、それ自体矛盾を内包したヨーロッパ民主主義が異なる土地であるアメリカに根付くこと

の難しさを照らし出しているのではないだろうか。

次にアメリカ合衆国批判を中心テーマとする第V部を検証しよう。第V部は、テキスト中に言及のあるボードレールの“Nordomanía”³²⁾への共感や、明言されていないが論旨の共通性を指摘されているダリオやマルティの反アメリカ帝国主義思想³³⁾から、北アメリカ文化に対する否定的な側面が強調されがちであるが、ロドーはまず強大なアメリカ合衆国への模倣に走りがちなイスパノアメリカの人々に警告を発した後で、北アメリカ文化の特質を列挙する。まず、ピューリタンの伝統から発し、これまでユートピアに過ぎなかった「自由」の概念を実現したこと、「労働」の偉大さと力強さを明らかにしたこと、そして、たくましい原始性の発露である健康、器用さ、体力への信仰である。こうした要素の調和した文化から、努力と行動を促すエネルギーであるオプティミズムや信頼が生まれているとする³⁴⁾。もちろんロドーはそこに、偉大なる伝統に基づく美なるものと真実の理想が欠けていることを指摘することを忘れない。そしてラテンアメリカの人々について、

—tenemos—los americanos latinos— una herencia de raza, una gran tradición étnica que mantener, un vínculo sagrado que nos une a inmortales páginas de la historia, confiando a nuestro honor su continuación en lo futuro³⁵⁾.

[我々——ラテンアメリカ人は——種族の遺産、維持すべき民族の伝統、我々を歴史の不滅のページへと結び付ける聖なる絆を持ち、その将来における継続を我々の名誉に委ねるのである。]

と描き出し、ヨーロッパの歴史、特にラテン的伝統との連続性を担うものと位置づける。しかしすぐに、人類の輝かしい発展における実り豊かな時代はしばしば同時代の異なった二つの勢力が合わさって生じたものであるとし、ギリシャ文明のアテネとラケダイモンの二市の場合を挙げて以下のように述べる。

América necesita mantener en el presente la dualidad original de su constitución, que convierte en realidad de su historia, el mito clásico de las dos águilas soltadas simultáneamente de uno y otro polo del mundo, para que llegasen a un tiempo al límite de sus dominios. (—) Y si una concordia superior pudiera vislumbrarse desde nuestros días, como la fórmula de un porvenir lejano, ella no sería debida a la *imitación unilateral* (—) de una raza por otra, sino a la reciprocidad de sus influencias y al atinado concierto de los atributos en que se funda la gloria de las dos³⁶⁾.

[アメリカは現在、その構成が本来備えている二元性を維持する必要がある。それは、各々の領土の境界に同時に到達するよう世界の両極から同時に放たれた二羽の鷲の古い神

話を、歴史の現実に変えることである。(一)そして、もし優れた調和が我々の時代からほのかに見えるとすれば、その遠い未来の方策はひとつの種族による他の種族の「一方的な模倣」によるのではなく、相互的な影響関係や両者の栄光が立脚する特性の賢明な調和によるものとなるだろう。]

ここに描かれているのはアングロアメリカとラテンアメリカの統一への理想であるが、どちらか一方の価値観の選択はなされていない。“la imitación unilateral”「一方的な模倣」ではなく、“la reciprocidad de sus influencias”「相互的な影響関係」³⁷⁾が目指されているのである。ここで意図されているのは「意志と功利性」を特徴とする前者への批判よりむしろ、「知性、感情、理想」を備えているはずの后者の相対化であり、価値の同等性ではないだろうか。二つのアメリカはしばしば、このロドー作品中で重要な文学的要素となっているシェイクスピアの『嵐』の登場人物であるキャリバンとアリエルに重ね合わされてきた。また『嵐』は、この作品の思想を語る上で不可欠のテキストであり、読者は常にこのシェイクスピア劇に重ね合わせつつ『アリエル』を読んできたといっても過言ではない。それゆえ、このエッセイ中での二つの表象が担う機能について、プロスペロも視野に入れつつ考えてみたい。

本稿第2章ですでに述べたように『アリエル』にはプロローグとエピローグによる強力な枠組みがあり、この作品にメタテキスト性を与えると同時に、17世紀ヨーロッパの古典である『嵐』をアリエルとプロスペロという登場人物によって強く喚起する。また第Ⅵ部の終わり近くでもこのシェイクスピア作品についての言及があり、アリエルについて以下のように描き出している。

Ariel es la razón y el sentimiento superior. Ariel es este sublime instinto de perfectibilidad, por cuya virtud se magnifica y convierte en centro de las cosas la arcilla humana (—). Ariel es para la naturaleza, el excelso coronamiento de su obra que hace terminarse el proceso de ascensión de las formas organizadas, con la llamarada del espíritu. Ariel triunfante, significa idealidad y orden en la vida, noble inspiración en el pensamiento, desinterés en moral, buen gusto en arte, heroísmo en la acción, delicadeza en las costumbres³⁸⁾. [アリエルは理性と優れた感性である。アリエルは完全性へのこの気高い本能であり、その美徳は賛美され、人間という土くれを諸物の中心となすものである。アリエルは、自然にとってその作品の傑出した頂点であり、精神の燃え上がる炎によって織り成された諸形式の上昇プロセスを完了させるものである。アリエルは勝利を収め、人生の理想と秩序、思考の気高い靈感、公平な道徳性、優れた芸術性、英雄的行為、繊細な慣習を意味する。]

一方キャリバンとプロスペロについては、このような人間精神の理想のシンボルであるアリエ

ルとの関係において、次のように位置づけられている。

Su (Arielの) fuerza incontrastable tiene por impulso todo el movimiento ascendente de la vida. Vencido una y mil veces por la indomable rebelión de Calibán, proscrito por la barbarie vencedora, asfixiado en el humo de las batallas, manchadas las alas transparentes al rozar el «eterno estercolero de Job», Ariel resurge inmortalmente, Ariel recobra su juventud y su hermosura, y acude ágil, como al mandato de Próspero, al llamado de cuantos le aman e invocan en la realidad³⁹⁾.

[アリエルの比類ない力は、人生のあらゆる上昇運動の推進力である。飼い馴らせないキャリバンの反逆に幾度となく打ち負かされ、その野蛮な勝利者に追放され、戦闘の煙に息を詰まらせ、透明な羽は「ヨブの永遠の穢れ」に触れて汚されても、アリエルは滅びることなく生き返り、その若さと美しさを取り戻し、プロスペロの命に従うように、アリエルを愛し、現実に呼び出そうとする全ての人々のもとに軽やかに馳せ参じる。]

つまりキャリバンはアリエルを打ち負かす訓化されない反逆者であり、プロスペロは理想であるアリエルを呼び出す主人である。しかしアリエルの場合と同様、シェイクスピア劇の枠内での役割をその理念の表象としてなぞるだけであり、ラテンアメリカの現実につなげるような議論の展開はない。アドルノの言うように、読者の前に「そのまま」示されているのみである。こうしてロドーはシェイクスピア劇『嵐』を読者の前に呼び起こし、このエッセイ冒頭に示してあるようにアメリカの若者たちに向けて（“A la juventud de América”）、アリエルの理想を常に念頭に置くよう求めてプロスペロの演説を締めくくる。しかしこの三つの表象は1900年以後現在まで、繰り返し取り上げられて植民地後の世界を語る豊かな議論を生んできた。上述のエッセイ「キャリバンの勝利」（初出は1898年）において既にダリオがアメリカ合衆国をキャリバンと呼んでいることから『アリエル』の解釈においても、精神主義・理想主義のアリエルこそはラテンアメリカであり、野蛮で物質主義のキャリバンはアメリカ合衆国であるとする読みが主流であった。その後、『アリエル』は先住民やアフリカ系アメリカ人の視点の欠如を批判され、少なくともこれまでの読みにおいては、ラテンアメリカ文化のアイデンティティとして無効であるという批判を向けられるようになっていく。しかし、1968年にネグリチュードの詩人であるエメ・セゼールの『ある嵐』、1971年にキューバのロベルト・フェルナンデス・レタマルのエッセイ『キャリバン』が書かれると、ポストコロニアリズム文学批評においてアリエルはラテンアメリカ文化を表象するものではなく、白人＝ヨーロッパ中心主義の侵略者プロスペロの従順な協力者に過ぎず、むしろキャリバンこそはラテンアメリカの歴史・文化を象徴するものであるとする読み替えを生み出す契機となった。またキャリバンが、米西戦争に勝利しラテンアメリカへの干渉の意図をあらわにしていたアメリカ合衆国を表象していると

同時に、このエッセイが書かれた当時押し寄せていたヨーロッパからの大量移民による社会的混乱、民主主義の腐敗、暴力などの「内なる」キャリバンも表していたのではないかという最近の指摘も、多義的な表象としての機能を示していて興味深い⁴⁰⁾。『アリエル』が投げかけたこの影響の大きさは、文学作品である『嵐』をこの作品中の社会文化思想の展開に重ね合わせるという、エッセイ特有の手法の成功の証と言えるだろう。さらにいえば、地中海を舞台とする『嵐』がウルグアイ人作家によって旧植民地アメリカの社会文化的な議論に重ね合わされたとき、「富裕・繁栄」を意味する《プロスペロ》とカリブの食人種canibalのアナグラムから作られたとされる《キャリバン》の名前、この二人の征服者（主人）—被征服者（奴隷）の関係が異質の文脈において問いなおされ、新たな読みを可能にする基盤が用意されたのである。アドルノの言うように、概念を定義せず連続性を追及しないエッセイというジャンルにおいて提示されたこの三つの表象は、自由にその意味を具体化し、推し進めていったのである。

おわりに

『アリエル』は、幾重にも張り巡らされた「文学化」の手法と、統一性や連続性を拒み結論を引き出さない思想の織り成すタペストリーの組み合わせによって、エッセイというジャンルにきわめてふさわしい文学的＝思想的な作品となっている。ロドーがジャーナリスト・作家として活躍したウルグアイはアルゼンチンやチリとならんで、先住民やアフリカ系移民の極端に少ない、ヨーロッパ系移民の国として独立した。したがって言語文化的視点から見れば、アメリカ合衆国やオーストラリア等の移住者植民地に近い状況にあったといえる。「本国」の「標準スペイン語」に対して「地方語」としての地位しかないラテンアメリカのスペイン語を用いて、新しい土地でのアイデンティティを求めながらも、強く残るヨーロッパ文化との結びつきとの葛藤を抱える当時の状況の中で、ロドーはエッセイという批評的な文学形式を選択した。『ポストコロニアルの文学』の著者たちは「移住者植民地のきわめて興味深い特徴のひとつは、最も重要な理論的著述のいくつかは、その最初期の時代から、文学創作のテキストそれ自体のなかにあらわれてきた点である」⁴¹⁾と述べている。ラテンアメリカ文学におけるエッセイは、ロドーの時代からボルヘスにいたるまで、主観と客観をあわせもつ思想の文学として、自己と場所との有効な同一化の関係を模索し、発展させてきたのだと思われる。

注

- 1) 『アリエル』を研究対象とした著作や論文に関しては、José Enrique Rodó, *Ariel*, Edición de Belén Castro, Madrid, Cátedra, 2000中の精選された文献リスト（131-135頁）を参照されたい。また、本稿の『アリエル』の引用はすべてこの版のテキストに基づく。
- 2) メキシコ革命開始前後のメキシコ社会におけるarielismoについては、Alfonso García Morales, *El Ateneo de México (1906-1914). Orígenes de la cultura mexicana contemporánea*, Sevilla, Escuela de

- Estudios Hispanoamericanos, 1992に詳しい。またキューバ革命後に、ロドーと『アリエル』に対する肯定・否定的評価を収集し再検討を行ったMario Benedetti, *Genio y Figura de José Enrique Rodó*, Buenos Aires, 1966は、公平な立場での再評価を試みた価値ある研究書となっている。
- 3) Starobinski, pág.31.
 - 4) Ibid. Pág.31.
 - 5) Ibid. Pág.34.
 - 6) 特に注記のない限り、本稿における和訳は著者によるものである。
 - 7) Ibid. Pág.34.
 - 8) Ibid. Pág.40.
 - 9) アドルノ、『文学ノート』。
 - 10) 上掲書, 24ページ。
 - 11) 上掲書, 24ページ。
 - 12) 上掲書, 25ページ。
 - 13) 上掲書, 32-33ページ。
 - 14) 上掲書, 41-42ページ。アドルノによれば、科学の意識, 自分自身を批判する理性は, 自らの不変の原理にとらわれて殻を閉ざし, どんな新しいものも受け付けない。そして, 思想の快楽原理としての好奇心に敵対するものとなり, 幸福を裏切るものとなるのである。
 - 15) 上掲書, 40-41ページ。
 - 16) Rest, pág.22.
 - 17) Ibid. Pág.32.
 - 18) エッテがこの論文で用いた「超テキスト性」「アルシテキスト性」という術語はジュネットの用法に従っている。
 - 19) Ette, “, págs.49-62.
 - 20) Foster, págs.37-52.
 - 21) Ette, pág. 50.
 - 22) Rodó, págs.158-160.
 - 23) *Ibid*, pág.154.
 - 24) *Ibid*, págs.223-224.
 - 25) Foster, págs.42-45. フォスターは記号学的方法の例として, 1) 精神主義と物質主義の対立構造 2) 教育的姿勢 3) 古典世界への憧憬 4) 美の理想化 5) 芸術=美=真実の同質化 を挙げている。
 - 26) *Ibid*, págs.48-51.
 - 27) Rodó, págs.79-87. この版の序文でベレン・カストロは“Los intertextos ocultos”について言及している。
 - 28) *Ibid*, pág.177.
 - 29) *Ibid*, pág.191.
 - 30) *Ibid*, pág.183.
 - 31) *Ibid*, pág.193.
 - 32) *Ibid*, pág.196. 「北への嫌悪」を意味し, 現在ではラテンアメリカの人々の北米に対する強迫的な意識を指して使われる。
 - 33) Rubén Darío, “El triunfo de Calibán”, recopilado en *El modernismo visto por los modernistas* por Ricardo Gullón, Barcelona, Labor, 1984 および, José Martí, *Nuestra América*, Buenos Aires, Losada, 1980 を参照されたい。
 - 34) Rodó, pág.202.
 - 35) *Ibid*, pág.198.
 - 36) *Ibid*, pág.199.
 - 37) *Ibid*, pág.199.
 - 38) *Ibid*, pág.228.
 - 39) *Ibid*, págs.228-229.

- 40) *Ibid*, pág.77. ベレン・カストロはマルティの前掲書における“el tigre de afuera”, “el tigre de adentro”という表現を引いて, “Calibán de adentro”について詳しく解説している。
- 41) ビル・アッシュクロフト他, 245ページ。

参考文献

- Rodó, José Enrique, *Ariel*, Edición de Belén Castro, Madrid, Cátedra, 2000.
- García Morales, Alfonso, *El Ateneo de México (1906-1914). Orígenes de la cultura mexicana contemporánea*, Sevilla, Escuela de Estudios Hispanoamericanos, 1992.
- Benedetti, Mario, *Genio y Figura de José Enrique Rodó*, Buenos Aires, 1966.
- Starobinski, Jean, “¿Es posible definir el ensayo?”, Traducción de Blas Matamoro, *Cuadernos Hispanoamericanos*, mayo, 1998, no.575, pág.31.
- アドルノ, TH・W・, 『文学ノート』, イザラ書房, 1978年, 三光長治訳。
- Rest, Jaime, “Sarmiento y la comprensión de la realidad”, en *El cuarto en el recoveco*, Buenos Aires, CEAL, 1982, pág.22.
- ジュネット, ジェラルド, 『バランプセスト』, 和泉涼一訳, 水声社, 1995年。
- Ette, Ottmar “`Así habló Próspero`: Nietzsche, Rodó y la modernidad filosófica de *Ariel*”, *Cuadernos Hispanoamericanos*, junio, 1994, no.528.
- Foster, David William, “Procesos de literaturización en *Ariel*, de Rodó”, en *Para una Lectura Semiótica del Ensayo Latinoamericano*, Madrid, José Porrúa Turanzas, 1983.
- Darío, Rubén, “El triunfo de Calibán”, recopilado en *El modernismo visto por los modernistas por Ricardo Gullón*, Barcelona, Labor, 1984.
- Marti, José, *Nuestra América*, Buenos Aires, Losada, 1980.
- Césaire, Aimé, *La tragedia del rey Christoph. Una Tempestad*. Barcelona, Barral, 1971.
- Retamar, Roberto Fernández, *Calibán*, en *Calibán y otros ensayos*, La Habana, Arte y Literatura, 1979.
- ビル・アッシュクロフト, ガレス・グリフィ, ヘレン・ティフィン, 『ポストコロニアルの文学』, 木村茂雄訳, 青土社, 1998年。

The Essay in the Latin American Literature

— Concerning *Ariel* —

Kayoko IJIRI

Abstract

Introduction

In this paper we clarify the ways in which *Ariel*, the main work of José Enrique Rodó, has influenced discussions on Latin American identity by focusing on the close relationship between the underlying philosophy and the genre of the work, which is the essay genre.

1. The essay genre

The essay is a medium which unifies art and science which deals with concepts and ideas without defining them nor requiring the continuity that exists between them.

2. The language and structure of *Ariel*

The Basic structure of *Ariel* consists of a narrative nucleus with a fictional base. Moreover, it also has rhetorical and semiological features.

3. The philosophy of *Ariel*

We examine the discussions about democracy, North American culture, and characters in Shakespeare's *The Tempest* who demonstrate a plurality of values.

Conclusion

We have demonstrated that *Ariel*, written in the genre of an essay, is a work that is both literary and philosophical. It employs various literary techniques and weaves a tapestry of ideas which bind the work together. The essay is a literary genre in Latin America which has been used to examine effectively the cultural identity of Latin America by dissociating it from the cultures that the essay is derived from, namely European and Latin American.

Keywords: José Enrique Rodó, *Ariel*, essay, Latin America, Postcolonial Literature